SJ Interview

SJ インタビュー

東京大学大学院
教育学研究科
准教授

北村友人さん

カンボジアで二輪車を利用する若者への効果的な交通安全教育の確立をめざして

カンボジアはタイやラオス、ベトナムと国境を接する人口約 1500 万人の国だ。近年の急速な経済成長に伴ってモータリゼーションが進展し、特に首都・プノンペン市では交通渋滞や事故が深刻化している。

北村さんの専門は教育学で、途上国における教育政策やその普及状況について研究しており、その対象国の 1 つとしてカンボジアには10 年以上前から深く関わっている。北村さんは毎年、同国を訪問するたびに、年々市街地を走っているバイクやクルマの量が増え、危ない場面はもちろん、実際に交通事故が起きた場面を目の当たりにするなど、交通環境の悪化を肌で感じていた。そして、「今、何とかしないと手遅れになる」と（公財）国際交通安全学会の研究調査プロジェクトとして、カンボジアにおける効果的な交通安全教育の提案に取り組んだ。

若者の意識と運転行動を変えてもらうために

北村さんによると、カンボジアの交通事故死者数は増加傾向にあり、2005 年から 2014 年にかけて 2.46 倍となっている。2014 年の死者数（2148 人）を状態別にみると、約 7 割が自動二輪乗車中で、事故を起こしたライダーの約 4 割は 15 ～ 24 歳である。「将来的により良き交通社会を実現するためには、今の若者たちの交通規範に対する意識と運転行動を変えることが必要だと思いました」と、北村さんは若年層のライダーにアプローチすることにした。

プロジェクトでは、まずプノンペン市で二輪車を利用している高校生・大学生 1079 人に対して、規範意識と運転行動に関するアンケート調査を行った。そして、この回答者のうちの 17 人に協力してもらい、普段どのような運転をしているのかを知るための運転行動調査も実施。二輪車を運転する際に、ビデオカメラをヘルメットおよび二輪車本体 (ハンドル) に装着してもらい、運転状況を記録したのである。

ヘルメットとハンドルにビデオカメラを装着

道路を譲り合って使おうという意識が希薄

アンケート調査とビデオ映像を分析した結果、「男性で運転経験が 1 年以上ある人は車間距離を詰める」「運転経験が 1 年以上ある人は二輪車の追い抜きをする」「女性や大学生、運転経験が 1 年未満の人は追い抜かれが多い」など、運転者の属性に応じて運転行動に特徴があることがわかった。「人より早く行こうとする意識が強く、道路という空間は公共の場だから、みんなで譲り合って使おうという意識が希薄であることがわかります」と北村さんは説明する。

現在、カンボジアでは運転免許なしで 125cc 以下の二輪車に乗ることが可能だ。運転免許を取得して二輪車に乗っている人は全体の 5 割程度ではないかと北村さんはみている。また、学校においても交通安全教育はほとんど行われていない。こうした現状を踏まえ、北村さんのプロジェクトチームは今年 3 月、プノンペン市内で若年層を対象とした交通安全ワークショップを開催。運転行動調査で撮影した高校生・大学生の運転映像に出てくるヒヤリハット場面を使って、危険予測のポイントを解説した。カンボジアでは交通安全のイベントはあまり開かれないため、このワークショップは新聞やテレビで取り上げられるなど社会的にも注目を集めたという。

ワークショップの様子

「7 月にはプノンペン大学キャンパス内で二輪車を利用している高校生・大学生を対象に実技指導も実施しました。このような安全運転講習会を定期的に開催してくことが目標です」。

カンボジアの交通文化の成熟に寄与したい

この他、北村さんは交通インフラ整備に伴う道路利用者の行動変化に関する研究も手がけている。プノンペン市内に設置されている信号機は 7 種類くらいあるという。信号機は様々な先進国の援助で設置されてきたため、各々が自国の仕組みを導入するからだ。道路利用者にとっては使い勝手が悪く、交通マナーを悪化させる一因にもなっていた。こうした状況を改善しようと、国際協力機構（JICA）

がカンボジア政府やプノンペン市と協力して、2016 年度から約 100 箇所の信号機を統一した基準のものに入れ替えている。北村さんのプロジェクトチームはこのような道路のインフラ整備によって、道路利用者の交通行動がどのように変化するかを明らかにしようとしている。具体的には、100 箇所の中から事故や渋滞が多発する交差点をいくつか選定し、ビデオで撮影。その交差点の信号機が新しくなってから再度撮影し、信号機の入れ替えの前後での交通行動の変化を分析することにしている。これをもとに交通環境が運転に及ぼす影響について検証していく予定だ。

「安全で楽しく、他の交通参加者とも共存しようという交通文化がカンボジアでは未成熟です。私は交通安全教育というソフトを充実させていくことで良い方向に変えていけると確信しています。交通文化を育んでいくために、プロジェクトで効果的な交通安全教育について検討を重ねていくつもりです。カンボジアで得られた知見は今後、同じような課題を抱えている途上国にも活かしていけると思います」と北村さんは力強く語った。